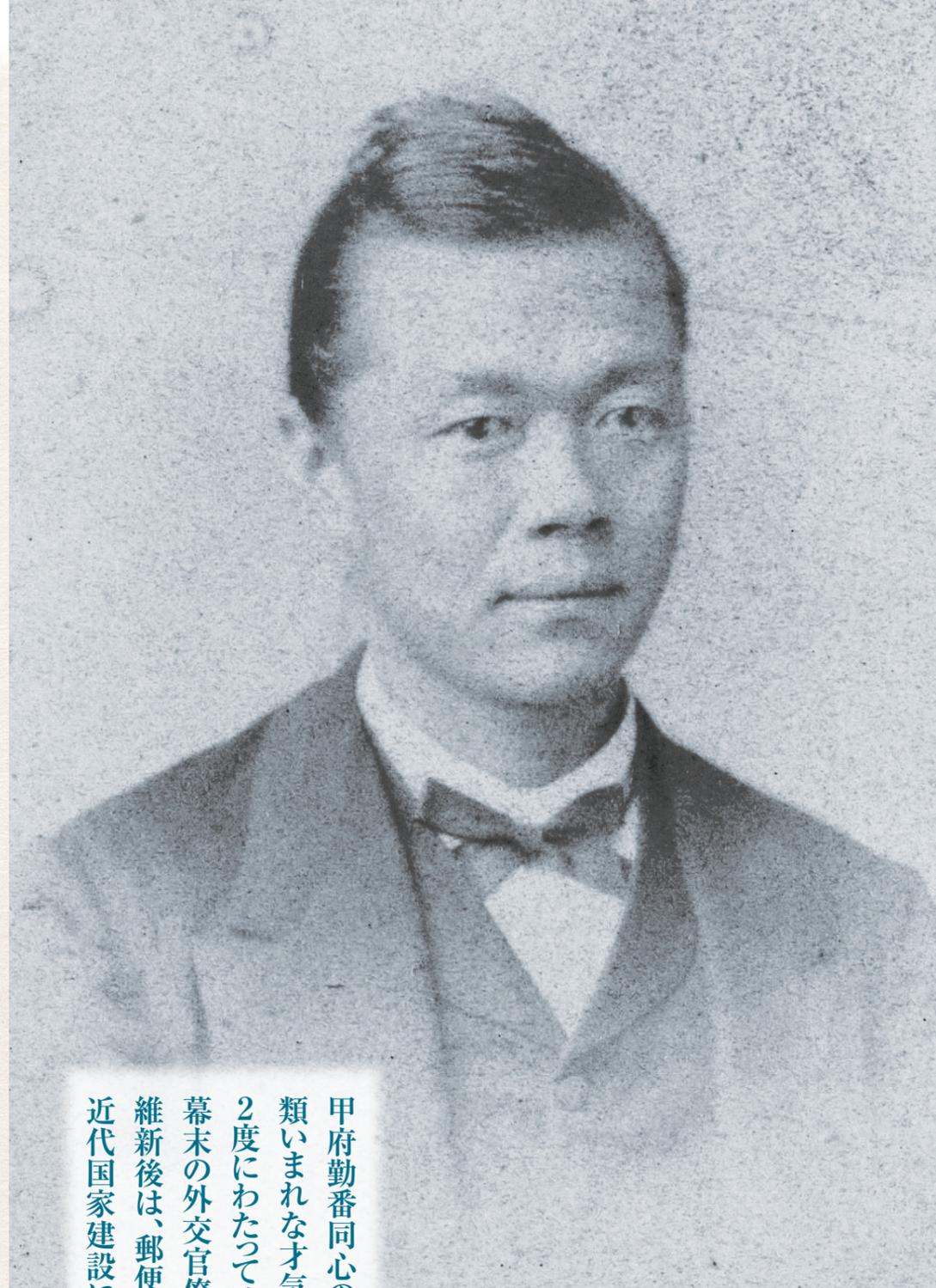


日本の郵便制度を確立

# 杉浦 讓

1835-  
1877



フランスで撮影した肖像写真(山梨県立博物館蔵)



初代駅通正杉浦讓顕彰碑(甲府市・遊亀公園)



杉浦が発行した日本で最初の切手。龍の柄から「竜切手」と呼ばれる(個人蔵)

甲府勤番同心の家に生まれ  
類いまれな才気が認められて幕府に出仕。  
2度にわたって渡仏するなど  
幕末の外交官僚として活躍した杉浦讓。  
維新後は、郵便制度の確立などに携わり  
近代国家建設に数々の功績を残した。

## 学問、武勇に優れた 甲斐の天才児

杉浦讓は、1835(天保6)年、甲府二十人町(現・甲府市相生)に、甲府勤番同心・杉浦七郎右衛門の長男・昌太郎として生まれた。

幼少のころより聡明だった讓は、私塾を経て11歳で徽典館(山梨大学の前身)に入学。18歳の時には自宅に塾を開き、門人を教えるようになった。徽典館を優秀な成績で卒業し、19歳で教授方手伝見習に採用され、3年後には教授方手伝に昇格。一方、文武兼修は武士たる者の本分と武芸の修練にも励み、26歳で免許皆伝を受けると、師より門人を譲り受け、剣術道場を開くなど文武に優れていた。

## 幕府の外交官僚として 国内外で活躍

1861(文久元)年、江戸幕府より「外国奉行支配書物御聞出役」の辞令を受け出仕。1863(文久3)年12月池田筑後守長発を正使とする横浜鎖港使節に随行し、徽典館に勤めていたころから親しくしていた田辺太と共に渡仏。約7カ月間に及ぶ出張で、欧州諸国の文物に触れ、見聞を深めた。



1864年に杉浦ら横浜鎖港使節が立ち寄ったエジプトのスフィンクス前で撮影した記念写真(国立国会図書館蔵「日本人(第3次)」34号より)

その後も、1865(元治2)年3月長州藩の軍船売買に関する調査のため上海へ出張。1867(慶応3)年1月には、パリ万国博覧会の將軍名代・徳川昭武に従い再び渡仏するなど、幕府の外交官僚として活躍した。

そのころ、日本は大きな転換期を迎えていた。讓がパリ万国博覧会から帰国した同年10月、江戸幕府第15代將軍徳川慶喜により大政奉還がなされ幕府は崩壊し、明治新政府が発足した。1868(慶応4)年5月、外国奉行支配組頭になっていた讓は、新旧政府外支配組頭を引き継ぎを完了すると役職を辞し、駿府移封となった徳川家第16代家達に従い、9月、静岡に移った。

## 官営郵便事業を創設し 初代駅通正に

1870(明治3)年、静岡学問所の教授を務めていた讓の元に明治政府より徵命が届き、出仕。民部省で交通・通信をつかさどる長官に当たる駅通権正を務めていた前島密と共に、郵便事業の準備に取り掛かり、同年6月、太政官へ官営郵便事業の創設を建議、採択された。その直後に前島が英国出張を命じられたため、代わって駅通権正となった讓は、2度の渡仏で欧州の通信制度を頻繁に利用した経験を生かし、制度設計やインフラ整備をはじめ、ポストや切手などの意匠、従来の郵便業者であった飛脚への対応などの実務に当たった。

1871(明治4)年3月1日、讓の総指揮の下、官営郵便事業が東京・大阪間で開始された。初日の郵便物は、174通だったという。同月、初代駅通正に昇進した。後に日本中に広がっていく定期的かつ定額料金で利用できる郵便事業の創設は、日本の通信に革命をもたらし、その後の近代化に大きく貢献した。

その後、讓は多方面で卓越した能力を発揮し、運輸会社の設立や、富岡製糸場・東京日日新聞の創業にも関与。大久保利通内務卿の懐刀と称され、内務省地理局長などを歴任し、近代国家建設に携わった。しかし地租改正のための測量に奔走する激務の中で病に倒れ、1877(明治10)年8月22日急逝。数々の功績を残し、43歳で生涯を閉じた。



## 山梨近代人物館

山梨県庁舎別館2階・3階(甲府市丸の内1-6-1)

開館時間：午前9時～午後5時  
休館日：第2・4火曜日/年末年始  
入館料：無料

TEL 055-231-0988 FAX 055-231-0991

〔記事監修〕 山梨大学 名誉教授 齋藤康彦